

豫科練



No.467 令和3年

11・12月号

○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.9…	2
○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》……………	3
○三四三空隊史⑨……………	4
○豫科練の戦争 翼を奪われ陸戦特攻隊へ⑥……………	7
○さらば予科練①……………	10
○「真珠湾開戦秘話」……………	15
○天国へのメッセージ①……………	22
○お知らせ……………	23
○寄付者芳名簿……………	23
○事務局日誌……………	23

公益
財団法人

海原会



高松宮殿下御歌
 海軍飛行
 予科練習生を偲びてよめる
 海軍に
 けいおほのこ
 敬事
 さみら新緑
 いくま
 せふ
 わる

高松宮殿下御歌
 微ヶ浦に立ちて海軍飛行
 予科練習生を偲びてよめる

海はらに
 はたおほそらに
 散華せし
 さみら声なく
 いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

海軍及び予科練各記念碑・慰霊碑 **第二美保空碑** No.9

第二美保海軍航空隊は、予科練習生の大量採用により昭和18年に開隊した予科練教育担当の美保空に、中練教程練習航空隊の増強によって昭和19年1月15日開隊された。開隊時は予科練の操縦教育に始まり、昭和19年5月には予備学生14期、予備生徒1期が入隊して教育を受けた。

これより先、3月15日には、後に姫路空となった峯山分遣隊を設置した。翌20年2月11日に第二美保空は大和空の開隊に伴って解散し、予科練教育だけの練習航空隊となった。



操縦教育練習航空隊としては、一年一ヶ月程と短い存在であったが、ここで教育を受けた予備学生、予備生徒、予科練習生の青春の想い出は強く、第二美保空の跡地は現在航空自衛隊輸送航空団に引き継がれているが、この地に「ここに第二美保空ありき」の碑を14期予備学生、1期予備生徒の有志が建立した。これより先、予科練の同隊出身者は、予科練習生が大空を指差す立像の「予科練之碑」と「わが飛翔の地碑」の二基を建立した。

所在地 境港市小篠津町
 問い合わせ先
 航空自衛隊美保基地広報班
 (〇八五九四一五〇二二一)

海軍飛行豫科練習生

遺書 遺詠 遺稿 辞世

書簡

鹿屋空所屬七六二空
海軍二等飛行兵曹

河西作郎

(横志飛七六四四)

十九歳

長野県

第一期乙種(特) 飛行予科練習生

拝啓

長らくご無沙汰いたしました。皆様にはその後お変わりありませんか。

私も相変わらず元気で奮闘いたしております故、ご安心ください。毎日暑い日が続きますがそちらは水不足しているとのことですね。決戦の年に水が無いと水田に、食料増産に困ることと思います。

そちらの新聞が見たいのですが、時々送ってください。

澄(註II妹)が東京に就職したそうですが、最上の喜びでありましょう。私も、一生の志望が決まった時の喜びが、今に続いているありさまです。

甚だ乱筆ではありますが、これにて失礼します。

家中一同様

七六二空は鹿屋空にて昭和19年2月に開隊し、同年10月T部隊として台湾沖航空戦に参加し、その後比島に進出し、同年11月には宮崎空に転進された。前哨としてバシー海峡海域の敵艦船索敵中の、昭和19年10月12日、敵機と遭遇交戦中に被弾自爆し戦死する。尚、戦死後に、功六級旭日八等を叙勲された。

三四三空隊史 ⑨

三〇一新選組飛行隊

笠井智一 (三〇一)

「横空へ転動を命ず。便あり次第出發せよ。」と特攻基地マバラカットの指揮所で玉井副長から命令されたのは、昭和十九年十一月初め頃。私は自分の耳を疑った。私だけが内地転動とは……。副長はそんな私にかまわず、横空には菅野大尉が待っている。早く準備するように、といわれただけで、くわしいことは何一つ知らされなかった。

私が九六陸攻でマバラカットを飛び立ったのは翌日の夕方だった。途中敵の夜戦に追われエチアゲに緊急着陸。二、三日後再び夜間飛行で台湾に向ったが、このときも夜戦に襲われほうほうのていで高雄にすべりこんだ。高雄から横空までは比較的安全であった。

横空に着き司令部に報告に行ったところ、宿指少佐に出会っ

た。少佐はサイパン二六一空虎部隊の隊長として勇名をはせた人で、大変なつかしかった。

さて横空の司令部で木更津へ行けといわれ、内火艇に便乗していったところ、今度は本隊は横空だとのことで、連絡の悪さにブツブツ言いながら横空へ戻り、やつとのことで本隊に合流できた。指揮所で菅野隊長に迎えられる着任の報告をした。隊長は比島での労をねぎらってくれた。この場には先着の酒井哲郎、新里光一、飯田一、その他六く七名の搭乗員がいたが、私以外はその後殉職したり戦死してほとんど残っていない。菅野隊長は昭和十九年四月、初代三四三空通称「隼」(防空を主任務とし、実験段階にあった新鋭戦闘機紫電部隊となる予定であった。)の分隊長であった。隊長は、われわれが新鋭機紫電改を装備し秘密兵器(天)の直掩を任務とすること、司令は源田実大佐であることなどを教えてくれた。源田大佐については源田サカスの名前を知っていたくら

いのもので、もちろん顔など知る由もなかった。当時司令は未着任で、菅野大尉を隊長に総勢十名たらずの部隊であった。私達の乗機となる紫電改を見たこともなく、比島で紫電を一度見たことがあったがそれも離陸直後を望見しただけで、グラマンに似たズングリした機であったことを覚えていたくらいである。また(天)についても秘密兵器ということ、直掩隊のわれわれでさえも近づくことは許されず、隊長以外一人として知っている者はなく、しばらくして隊長に案内されて見ることができた。飛行場の一隅に嚴重に周囲をシートでかこわれた一式陸攻の胴体下に、小さな翼のついた飛行機らしきものが吊下げられている。これがいわゆる(天)特攻機「桜花」なのであった。

この頃の三〇一飛行隊の保有機は紫電一型(私達は「と呼んでいた)で三、四機。指導教官は横空実験部の古賀大尉であった。初めて間近に見る紫電はズングリした中翼、脚は二

段引き込み式、なんと四翅ペラでエンジンがいやに大きく、翼には二十ミリの銃身が四本もつきでいて、見るからに強そうな印象を受けた。ただ胴体はかなりオイルで汚れていたの、ハハアこれは油圧系統に問題があるな、と直感した。案の定油圧系統に故障が多く、脚の出ないもの、ブレーキの不調、空戦フラップの作動不良など、搭乗員、整備員を泣かせたものである。それはともかく、虹を思わせる紫電の姿に、だれかが隊長とよく似ているなと言ったので一同大笑い。隊長も怒りもならず、苦笑いするばかりであった。

古賀大尉から機内の説明と計器、性能などの詳細説明。もの静かななかにも、これで貴様達は大任を果たすのだぞ、という気迫が感じられた。零戦に乗りなれていた私は、零戦がいやに弱々しく感じられてならなかった。

こうして訓練が開始された。一日目は座学と操作説明、地上滑走で、翌日から離着陸訓練と

なった。説明によると翼面荷重が大きい為に失速速度が非常に大きく、背面錐揉に入ると絶対回復しないとのことであった。初めての離着陸は多少不安もあったが何事もなく、訓練は順調に進められた。

訓練が開始されてから一週間もすぎたある日、黄色に塗装された低翼機が着陸した。これぞ待ちに待った紫電改（J改と呼んだ）の初見参であった。みなこの機体にむらがあった。さっそく座席に座ってみる。前方視界がよく座り心地も非常によい。また、翼外に出ている機銃は翼内に納められ、ベルト式給弾で、携行弾数も大幅に増し、その重裝備にみなよろこんだ。JにくらべるとJ改は非常に乗りやすかった。Jの短所はほとんど改善されていて、零戦にくらべても舵の効きが心持ちおそいことや、縦安定に少々劣る感じは受けたが、どのような操作をしても無理がきくし、舵も効き始めれば抜群の効きであった。また空戦フラップの作動である

が、まるで生きもののように入り入ったりするさまは、珍しくもあり、またみごとなものだった。失速速度やその性質は、改善されたとはいえ、紫電改の弱点だったであろう。訓練中失速して背面錐揉に入り、脱出することができなくて殉職した戦友も二、三名いた。引き起こしの際のGのかなりぐあいも零戦とは全くちがった。

同じつもりで引き起すと目の前が真暗になり意識がもうろうとしてくる。なれるにしたがつて目の前が暗くなっても、まだまだと意識して無理な引き起こしをしたこともあった。こんな時翼端から飛行雲を引くことがあった。飛行雲といえはB-29だけだと思っていたが、そうではないことがわかった。この発生状況を見ると、小さい渦が泡のように翼の先端から連続して発生しているのがよくわかる。零戦では味わえないことであつた。それだけ速力が出るといふことである。一機しかない紫電改は宝のようなもので、交

替で乗るのがたのしみで訓練飛行の時間も大幅にオーバーする毎日であつた。

毎日の猛訓練で練度も上りはじめた十二月十日頃、突然空襲警報が発令された。と同時にB-29一機上空、直ちに邀撃に発進せよとの命令が出た。私は一番近くにあつた飛行機に飛び乗り、高度八千から一万メートルのB-29に向つて赤ブーストいっぱい得上昇した。上昇の途中でどうも勝手がちがうと思ひ、よく見ると紫電に乗ってしまったのである。しかしさす

がの紫電でも直上一万メートル近いB-29を横空から飛び立つて補足することはできず、房総半島のはるか沖上空で攻撃は断念せざるを得なかつた。ただ上昇力のすばらしさ、二十ミリ機銃四門の同時試射には、改めてたのもしさを感じた。攻撃を断念してひよいと高度を見ると、一万三百メートルをさしている。機内は猛烈に寒く手足はしびれるように痛い。前方には黒々とした海が見えるがあと

皆目わからない。よくよく見ると富士山が真下に見えた。前方の海は日本海だ。何と日本も狭いものだと思つたが、それだけ紫電のスケールが大きかつたと言えるかもしれない。やつこの思ひで着陸。全機無事帰投したが、誰一人B-29を捕捉、攻撃したものはいなかった。ただ、あの黄色いJ改で上つた手の早い搭乗員が誰であつたのか、そのころの同僚はみな死んでしまひ今となつては知るすべもない。これが三四三三〇一飛行隊の初陣の戦闘詳報である。

このころから三々五々と転勤者がやつてきた。比島から帰つてきた者、内地からの者、甲飛十一期の浅間、大森、桐山、西村、特乙の伊沢、笹本、深山、桜井、宮崎分隊長、沖本等なつかしい顔もあつた。当然保有機数も増えはじめた。もつとも、紫電がほとんどで改は二、三機にすぎなかつた。訓練はほとんど紫電であつたが、非常に乗りにくい飛行機に比較的飛行時間の少ない搭乗員が乗つたのに、横

空時代には事故は一度もなかった。これは古賀教官の卓抜した指導力と適切なアドバイスのおかげだと思う。ある朝訓練前の整列で菅野隊長から、我々三〇一飛行隊は「新選組」というニックネームで呼ばれること

になったが、この隊名は久邇宮殿下の命名であり、源田司令は来年一月に着任されること、また当初の(因)直掩任務は二五二空の零戦隊が受けもち、三四三空は紫電改の制空隊となることをはじめて聞かされた。その時隊長は私達に横空もせまいし何処かよい基地はないかなあーといわれた。私はとっさに「隊長松山は絶対ですよ。飛行場はよいし人もよいし」と一生懸命ほめた。隊長は「そうか、そんなにいいか。一度行ってみるか」と早速に丁改で出発された。その日に帰投される筈が音沙汰もない。馴れない飛行機で不時着でもと、皆心配したが、本日は松山で宿泊するとの連絡が入ったのは夕方まで暗くなってからのことで、一同安堵の胸をなでおろ

したのであった。翌日正午頃帰投された隊長はなるほど松山はいいところで、現在は六〇一空が訓練中だが間もなく転進の予定なので、飛行場があき次第移動することが決定された。

余談になるが横空では、仮入隊で正式の所属ではなかった。飛行作業終了後はデッキに帰って休むのだが、寝具などは完備しておらず、しかたがないので毎日外出の許可を受けに行くことになる。二、三日は快よく許可されたが、たびかさなるうちにとうとう「ここ横空は日本一のうるさい航空隊だ。毎夜外出するのは貴様達だけだ。いいかげんにせー！」と大目玉をくらった。もつとも、そうはいいながら許可はくれる。隊内では酒保として酒は支給されるが持出すことはできない。それでブドウ酒を手に入れ、これを飛行靴の中につっこんでその上からズボンを下ろし、衛兵に見つからないよう歩調をとっておそろおそろ堂々と出てゆく。無事通過したら途中靴の中からブドウ酒の

ビンを出して、意気ようようと飲み屋に上がりこんだ。見ると隣の部屋の上り口にもわれわれと同じ半長靴がぬいである。どこの隊だとたずねると、潜水艦の乗員だという。合同でやろうじゃないかと、どちらからともなく話が合つて酒とブドウ酒のチャンポン。たがいに明日の戦果を誓い再会を約して狭い部屋でごろ寝となる。灯火管制下のうす暗い部屋でよい調子で飲んだものである。

このようにして日がたつにつれ搭乗員や飛行機の数もふえてきて、松山が基地として決まったのは十二月二十日頃。進出したのは二十五日頃だったと思う。松山で各飛行隊も集結、志賀飛行長、源田司令も着任され三四三空剣部隊としてその勇名を内外に轟かせたのである。

私は世界の傑作機としてよく話題になる零戦の本当の強さを知らない。なるほど開戦当時は強かったであろうが、私が戦地に出るころには、その全盛期はすでに終っていて、グラマン

F6Fの独り舞台であった。もちろん私達の練度が低かったせいもあるが、とにかく第一線に出たとたんグラマンの優秀さをいやというほど思い知らされたのである。私は偶然生き残ったが、多くの同僚はこのことを死をもって知らされたのである。戦史家たちはソロモン航空戦以来の戦闘について、パイロットの練度を重要な敗因とすることが多いが、練度の低さを承知の上で戦地へ送り出した指導者にも責任があるように思われる。ともかく飛行機自体も零戦では通用しなくなっていたのである。だから私は自分が紫電改に乗れたことを非常にうれしく思い、そして三四三空の隊員であったことを生涯の誇りに思っている。



豫科練の戦争

久山 忍 著

翼を奪われ陸戦特攻隊へ⑥

甲飛十四期 戸張 礼記

終戦の日

昭和二十年八月十五日、この日はとてつもなく暑い日だった。朝から汗みどろの対戦軍訓練中、緊急の総員集合の命令が出た。時間は正午少し前だった。場所は幕舎前広場である。

(何事だろうか)

(ついに攻撃か)

(いよいよ死ぬときがきたか)

急いで駆け付ける。広場に整列した。前方の台に中隊長が上った。中隊長は軍刀を下げ、正装をしている。

「間もなく天皇陛下の玉音放送がある。心身を正しくしてよく聴け」

小型のラジオが真ん中の机の上に置いてあった。

陛下の声を聴くのは誰もが

初めてである。我々は直立したまま身じろぎもしなかった。
(総員玉碎命令が下るのか)
緊張と不安が入り混じった空気が我々を包んだ。

放送が始まった。聞き慣れない抑揚の強い声が流れて来た。
(これが陛下の御声か)

雑音がひどい。言葉の意味がよくわからない。それにしても暑い。汗が顔中からしたたり落ちる。

頭を下げて身をこわばらせる。眼をつむってただひたすら聴いた。さっきまで騒がしかったセミの声もとだえた。誠に不思議なこれまで体験したことのない深閑とした時空がそこにあった。

聞こえるのはラジオから流れる陛下の声だけである。陛下の声が、延々と、そしてきれぎれに聞こえてくる。すごく長く感じた。神経を研ぎ澄まして耳を傾ける。やはり声がよく聞き取れない。

ふいに、奇妙な抑揚の言葉のなかで、「戦いを終わらせたい」

という言葉だけがわかった。
(どうやら戦争が終わったようだ)
(日本は負けたのか)

我々は終戦を迎えたことをやっと理解した。みんな泣き出した。しゃくりあげている者もいる。私も泣いた。これは何の涙なのか。それが自分でもわからないまま涙がこぼれる。涙が汗とともに顔からしたたり落ちた。

「闘いは終わりだ。負けたんだ」
誰かが声を出して言った。私は信じられなかった。
(終戦？敗戦？どういうことだ?)

まだ俺たちは生きているのに、まだ戦つてもいないのに。張りつめていた私のなかのなにもかもが、ゆっくりと、ばらばらに四散していくような感覚に包まれた。喪失感というのか、脱力感ともいうのか、とにもかくにも言葉もない。

そのくせ、心の奥底のどこかで、あつけらんとした安堵感がじわじわと湧いていた。

自分でも気づかないうちに心が解き放たれてゆく。その解放感を舌の奥でじつくりと味わっているもう一人の自分がいた。

(これで家に帰れるよかった)
私にとつての終戦は死からの解放であった。外面は悔し涙を流しながら、内面は戦争が終わったことを喜び、ほくそ笑んでいた。その喜びは卑怯でひそやかなものだった。

放送が終わった。そのとき中隊長が声を荒げて指示した。
「戦いが終わったわけではない。別命あるまで、徹底抗戦の態勢を堅持する」

その声で、はっと我に返った。陽が高い。蝉しぐれが急に大きく聞こえてきた。

翌十六日、中隊長が叫んだ「徹底抗戦」は消滅し、終戦が決定的になった。

日本に平和が訪れた。それは突然であり、唐突であり、いきなり大きな風呂敷包みを蔽いかぶされたような平和の到来であった。

これからどうなるのか皆目わからない。米軍から凄惨な支配を受けるかもしれない。しかし、そのときの私に戦後の恐れはなかった。あるのはただ、特攻隊から解放されたという安堵感だけであった。

帰郷

次の日から武装解除作業が始まった。何の混乱もなかった。みな気が抜けたようになっていた。

別れるとき、お互いに復員後の交友を約束したり、別れの寄せ書きや名簿を作ったりした。昭和二十年八月二十五日から復員準備に入り、二十七日が樺太、北海道出身者の隊員たち、二十九日に関東、関西出身者が退隊することになった。そして最後に東北出身者が退隊となった。東北出身者の退隊は八月三十日だった。みな肅々と退隊していった。

私は大湊から汽車に乗り、途中、仙台駅で一泊した。米も飯盒も持っていたが炊くことがで

きず困っていたら、駅員さんが炭火を起こして炊いてくれた。涙が出るほどありがたかった。

昭和二十年八月三十日、常磐線の汽車に乗った。ゴトゴトとゆられる。筑波山が見え、霞ヶ浦が見えたとき、生きて帰ってきたという実感が初めて湧いた。

目がうるんで風景がぼやけた。

(嗚呼！国破れて山河あり)

「誰か故郷を想わざる」の歌が頭の中をぐるぐる回った。

戦闘帽をかぶり、大きな衣袋をかつぎ、片手に軍刀を下げて、懐かしの家路を辿った。昔とちつとも変わっていないかった。我が家の前に立った時、しばらく呆然とした。

玄関の戸を開けた。

「ただいま」

と声をかけた。母が奥からでてきた。じつと私を見ている。私であることを確かめるように母がゆっくりと近寄って来た。数歩前で立ち止まった。床にしがずに両膝をついた。母が両手で顔を覆った。そして泣いた。

特攻隊員の真意

太平洋戦争の開戦当初は海軍も優勢だったが、ミッドウエー海戦以後、明らかな物量の差に苦戦を強いられた。そして私が予科練に入隊したころは敗色が濃い戦時体制の真つただなかつた。

戦局の悪化に歯止めは最後まで効かなかつた。そして追い詰められた日本軍は、ついに若者に爆弾を抱えさせて体当たりをさせるという特別攻撃隊を出撃させた。

航空機による最初の特攻隊は遠く離れたフィリピンのマバラカットで編成された。大西瀧治郎中将が訓示を与えて「敷島隊」を送り出したのが最初の特攻隊だと言われている。

「敷島隊」の五人のうち四人が予科練出身である。敷島隊の中心野磐雄と谷暢夫は甲十期生であり、二人は土浦航空隊時代の友人である。

昭和十九年十月二十五日、敷島隊はわずか五機の零戦で出撃

して空母を撃破した。その戦果は日本軍を歓喜させ、米軍に衝撃を与えた。そしてこの特攻作戦は、追い詰められた日本陸海軍の唯一の攻撃法として定着し、絶望的な戦雲の中に先輩たちが次々と消えていったのである。その数は陸海軍あわせておよそ六〇〇〇人といわれている。

戦時中、勝利を信じ、「決戦の大空へ」の呼びかけに応じた少年たちは、人々から「若い血潮の予科練」ともてはやされた。しかし終戦後は「特攻くずれ」「ヨタレン」などと蔑まれることが多かった。私も、「お前らがしつかりしないから負けたんだ」と言われたことがある。この言葉は胸に突き刺さり、今なお抜けていない。

戦後、幾多の予科練出身者が世間を騒がせる事件を起こしているが、「特攻くずれ」と言われて爆発するのは無理もない心情だった。国のために死を賭して頑張った末の罵倒である。誰もが荒れもするであろう。戦後、私は少年のまま社会の

荒波のなかに放り出された。そして敗戦の混乱のなかで大人社会の醜さを見せつけられた。戦後の社会は「真面目」だけでは生きられない世の中になっていった。何事にも表と裏があり建前と本音がある。要領のいい奴が得をし、正直者が損をする社会になっていった。国家のことよりも個人の利益が優先される世界になっていたのである。

私はなにも信じられなくなつた。少年ながらに「もう騙されないぞ」と誓つた。心のなかは不感感でいっぱいだった。そしていつしか、私は自分が予科練出身であることを他人に話すことはなくなつていった。

年月が経つた。時代が大きく変わった。元兵士だった方々の多くが物故された。予科練は今、全ての日本人から忘れ去られようとしている。

(このまま忘却されていいのだろうか)

あれほど忘れたいと願つた予科練のことが、今、気になつて仕方がない。

私は思う。予科練は昭和の白虎隊であつたと。予科練生は、身を捨てて国を守つた殉国の侍であつたと。

戦争指導者たちは航空機だけでなく、人間爆弾「桜花」、その他、たくさんの特攻機や特攻兵器に予科練出身者を当然のように搭乗させた。そして、前途有為な二十歳前後の若者たちが特攻で散つていった。その悲壮さを考えるとき涙なしではいられない。

もし、あの若者たちが戦後も生きていれば、どれほど復興を目指す日本の力となつただろう。そう思うとあまりにも悔しい。

死地に赴く彼らは何を想つたのであろうか。

出撃の時、先輩たちは、例外なく、

「先に行くぞ。後を頼むぞ」と言い残して出撃して行った。我々は、「ご成功を」と叫び、機影が消えるまで帽子を振り続けた。

先輩は何を頼むと言つたのか。私は、当初、「これからの空の守りはお前たちに任せただぞ」という意味だと思つていった。後に残つた後輩たちが、先輩に続いて飛び、日本の空を護つてくれることを信じて死んでいったのだと、私はそう思つてきた。

しかし後日、思いを新たにするようになった。本当の答えは残された遺書にあつた。

◇ 神風特別攻撃隊神雷部隊
第九建武隊
海軍二等飛行兵曹 高瀬 丁
十九歳(北海道) +
第十二期丙種飛行予科練習生

母上様
いよいよ出撃します。今さらなにも悔いはありませんが、暖かく愛しい母上様に、御恩を果たさずに征く事が残念であります。唯々、皇国に命を捧げる丁を誉めて下さい。

母上様、丁は死すとも魂をお留めて皇国に尽くします。お嘆き下さるな。丁は、この壮挙に

参加できて嬉しいです。武人の本懐です。
母上様、永く永くご幸福にお暮し下さい。丁は母上様のお写真を胸に抱いて、必ず必ず立派に死ぬ覚悟です。出撃の日、
妹よ

この兄死すとも嘆くなかれ。五体は無くとも魂はいつもお前達のもと、悠久の大義に生きている。嘆かず頑張ってください。妹よ、お前達は、帝国海軍の妹なるぞ。兄の死に方に恥じないよう。何事にも頑張ってください。父母上を頼んだぞ。兄が残す最後の言葉は父母に孝、君に忠を尽せのみだ。妹よたのむぞ。兄は勇んで死んでゆく。妹よ、体を大切に永く永く幸福に暮らしてください。

お前達の面影を偲びつつ征く。出撃の日

◇ 回天特別攻撃隊・天武隊
(回天で発進前後の手記)
海軍二等飛行兵曹 松田光雄
二十歳(茨城県)

先ずは、この壮挙に

出撃前、ちよつとでも家で母に会えたならば、念じたるは我が真の心なりき。

しかれども我が子、祖国のために散りゆくを喜ぶ我が母あれば、子は安心してご奉仕できるなり。

母よ、ああ母ちゃん、光雄は護国の鬼となり、母さんに面会に家に帰りますと、特眼鏡（注、潜望鏡）に映じたる水平線に折りたり。

身はたとえ米鬼と共に沈むとも笑顔で帰らん母の夢路に母上様、永く永くご幸福にお暮し下さい。

妹よ、体を大切に、永く永く幸福に暮らしてくれ。

松田先輩の遺書は小さな手帳に書いてあった。小さな紙面にぎつしりと書かれていた。文字のインクは滲んでいて今にも消えそうだったが、母や妹に対する想いが行間から溢れ出ていた。涙なくしては読めなかった。

松田先輩はこの手帳を遺して人間魚雷「回天」に乗り込み母艦の潜水艦を離れ、ひとり敵を求めて暗い海中に発進し、その後、消息を断つた。茨城県の人だった。

先輩たちの真意が切々と書かれていた遺書が特攻隊員の真情なのである。

先輩たちは、ただひたすら親兄弟や家族を思い、愛する人々と祖国を守るために一命をささげた。

そして、我々にかけて、「頼むぞ」

という言葉の真意は、俺は先に行つて死ぬから、生きている貴様たちが俺の父母を、俺の兄弟たちを、残された俺の家族をどうか守つてやってくれ、という意味だったのである。これをつきつめて言えば、俺の家族が住む祖国を守ってくれということであり、先輩たちの究極の願いは戦争に勝つて日本に平和をもたらしてくれという願いであったのである。私はそう考えるようになった。

さらば予科練 ①

三重海軍航空隊乙種飛行予科練習生十九期の山田先輩から「さらば予科練」を出版したのでとお送り戴いた。貴重な資料なので本誌に寄稿をご依頼した処、ご快諾を頂きましたので本号より連載致します。

編集部・保坂
乙飛十九期 山田 稔

予科練十五年の歩み

予科練（海軍飛行予科練習生）が、この世に存在したのは、昭和五年から終戦までの僅か十五年の間に過ぎず、長い日本歴史から見るとそれは一瞬間の間である。

しかし、この間に日本は支那事変から太平洋戦争と、激しい戦いのルツボの中へと突き進んでいった。太平洋戦争は、その名の示すごとく海の戦いであったが、その勝敗の帰すは海軍航空戦力によって決まったのである。

日本海軍航空三十五年史の後半の、十五年間が予科練苦闘の舞台であった。

若きは十四才で予科練となり十七才で第一線に活躍した。

本土決戦態勢となるや、若い胸の底に空飛ぶ夢を秘めながら戦局の要請に答え、水上・水中・陸上特攻とひたむきに敵撃滅に挺身した。本土決戦態勢となるや、予科練はよく戦つた。そして強かつた。

予科練！その足跡は民族の若い肉体と精神をうって一丸、高い組織力、機能力を発揮した亡びることのない日本歴史の花である。

予科練年表

昭和五年六月一日、横須賀海軍航空隊に予科練習部を置く。
初代部長 市丸利之助少佐、第一期生七十九名入隊
○横須賀海軍航空隊司令 原五郎大佐
副長兼教頭 桑原虎雄中佐
同年三月空母赤城にて初の夜

間着艦が行われた。使用機三式艦戦と一三式艦攻。

昭和六年六月第二期生百二十八名入隊。

○同九月十八日満州事変起こる。

昭和七年六月第三期生百五十七名入隊

同年十一月第一期生卒業

○一月第一次上海事変勃発

上海戦線にて日本海軍航空隊の初空戦が行われた。使用機三式艦戦と十三式艦攻、平林大尉他。

昭和八年五月、第四期生百五十名入隊

同十一月、二代部長寺岡謹平大佐着任。

○源田サーカス売り出す。使用機九〇戦、報国機献納式における編隊特殊飛行

昭和九年五月、第二期生卒業

同年六月第五期生二百名入隊

八月三代部長 丸茂邦則大佐着任

○九四艦爆制式となる初めての艦爆。

大西瀧治郎 横空副長兼教頭
本年より陸軍飛行学校に生徒

隊（少年飛行兵）新設

昭和十年五月、第三期生卒業

第六期生百八十七名入隊

十一月四代部長 内田市太郎大佐着任

○九六戦の試験飛行始まる。

八試沿岸偵察機（九六陸攻）の試験飛行始まる。急降下爆撃の開発進む。昭和十一年五月

第四期生卒業

同年六月、第七期生二百四名入隊

○この頃より海軍航空界において航空主兵論台頭す。

山本五十六、大西瀧治郎他。超大戦艦大和、武蔵建造始まる。

昭和十二年六月、第八期生二百十九名入隊

同年八月、第五期生卒業

九月、五代部長 松岡知行大佐着任

十一月、空母飛龍の進水式見学（横須賀）

○四月、朝日新聞の神風号、東京ロンドン間の新記録をつくる。七月支那事変起こる。軍艦出雲の九五水偵、敵戦艦機を撃墜す。中攻の渡洋爆撃行われる（台北、濟州島）九六

戦の初陣、南京上空にて敵四十機を撃墜。

九月、甲種予科練の制度ができた。

昭和十三年一月第六期生卒業

同年六月第九期生二百名入隊

同年九月、第七期生卒業

同年十一月、第十期生二百四十名入隊

○支那戦線における航空作戦で予科練出身者の活躍が目立ち、特に二期生桑島、三期生徳永兵曹の南昌敵飛行場着陸

焼き討ち、二期生東山兵曹の太平寺敵飛行場着陸等は国民をアツと言わしめた。航研機が長距離世界記録を樹立した。

昭和十四年三月飛行予科練習部を霞ヶ浦航空隊に移転す。

同年六月、第十一期生三百九十三名入隊

同年九月、第八期生卒業

同年十一月、第十二期生三百七十名入隊

六代部長青木泰次郎大佐着任

○一万米競争初めて行われる（荒川沖往復）

昭和十五年六月、第十三期生二百九十七名入隊

同年八月 第十四期生百九十八名入隊

同年十一月十五日 飛行予科練習部霞空より独立して土浦海軍航空隊となる。

初代司令 青木泰次郎大佐

同月第九期生卒業 雄飛の松を植える

同年十二月 第十五期生六百二十名入隊

○七月重慶空襲に零戦初参加

六期生岩井兵曹等の活躍は航空史の一頁を飾る。

十一月の明治神宮国民体育大会に予科練体操登場。

昭和十六年五月、第十六期生千二百名入隊

同年五月、第十期生卒業

同年九月、第十一期生卒業、第十七期生千二百六十九名入隊。

○十二月八日、太平洋戦争開戦、一期〜八期まで第一線最精鋭としてハワイ及びマレー

沖海戦に参加

九期前線への途上、十期十一期飛練教育中。

昭和十七年三月、第十二期生卒業

同年四月、二代司令 長谷川喜一大佐着任

同年五月、第十八期生千四百八十名人隊

同年五月、第十三期生卒業

同年七月、第十四期生卒業

同年八月、三重航空隊（予科練）開隊

同年十一月、第十五期生卒業

同年、三代司令松岡知行大佐着任

同年十二月、第十九期生千八百名人隊

○予科練制服七つ釦となる。

太平洋全域に華々しく海空戦が展開され、予科練の奮戦は続いた。五月七日珊瑚海海戦において翔鶴索敵機菅野飛曹長は敵機動部隊を発見、逐一敵情を報告後帰途についたが味方攻撃隊と出会うや反転これを誘導し、遂に燃料つきて敵艦に壮烈なる自爆を遂げた。

こうした活躍はハワイ・マレー沖海戦、決戦の大空へ等の映画となつてますます予科練の姿を印象づけたのである。

昭和十八年三月、四代司令 森敬吉大佐着任

同年四月、特乙制度発足

同年五月、第二十期生二千九百五十一名人隊

同年六月、第十六期生卒業

同年十二月、第二十一期生四千三百五十六名人隊。

この年一月末のレンネル島海戦を始め、ブーゲンビル島沖海戦、十二月のマーシャル沖海空戦と熾烈なる海空の消耗戦が行われ、戦前からの百戦錬磨の士が数をたのむ敵の物量作戦の前に姿を消していった。また四月十八日、連合艦隊司令長官・山本五十六大将のブイン上空における戦死（搭乗機操縦、四期小谷立）や、六月八日戦艦陸奥の内海における爆沈等一連の暗雲が、さなきだに（そうでなくても）戦勢にさらに不安を加えたのである。

昭和十九年二月、第十七期生卒業

同年三月第十八期生卒業

この頃より、整備予科練等の入隊が急増する。

同年六月 第二十二期生入隊

同年八月 第二十三期生入隊

同年十二月第二十四期生入隊

○十月十八日、関大尉以下六名第一次神風特別攻撃隊として編成される。

○二月のクエゼリン、ルオット島の玉砕をはじめ、六月マリアナ沖海戦、聯合艦隊司令長官古賀峯一大将戦死（搭乗機操縦十五期渡辺）その後、台湾沖、レイテ海戦と皆我に利あらずついに特別攻撃隊の出現をみたのであるが、一扇よく落日をかえす能わず、若き同窓は祖国を、親兄弟を偲びつつ出撃していった。

昭和二十年二月、第十九期生卒業

同年八月十五日終戦、復員

○敗色いよいよ濃厚に敵の本土爆撃も本格化し、大勢すでに決したのであるが、海空軍は最後まで予科練を中核として戦った。

B29撃墜王として知られた一期遠藤大尉も今やなく、沖繩をはじめ九州東方海上、硫黄島ウルシーなどの特別攻撃隊名簿の過半は我等同窓の名をもって埋められた。

八月十五日、最後の特攻として第五航空艦隊司令長官、宇垣中将与彗星艦爆に同席し沖繩の敵艦に突入した九期生遠藤秋章飛曹長の悲壮なる最後をもつて予科練史は終焉を告げたのである。

※文中にある、入隊者及び戦死者数は、著者が調査した数を改重して原稿どおりとしている。

予科練入隊者数

	甲飛	乙飛	特乙	丙飛	合計
	1~16期	1~24期	1~10期	1~17期	
入隊者数	人 139,720	人 87,850	人 6,715	人 7,298	人 241,583
戦死者	人 6,778	人 4,984	人 1,348	人 5,502	人 18,612

慰靈のことば

秩父の山々を遙かに望み、麓をめぐる水また清き、ここ小川町に奇しくも終戦二十五周年をけみした（閲・あらためて）記念すべき今日尊くも懐かしき予科練戦没者の英霊をお迎えし、心から追慕の誠を捧げたいと存じます。

顧みれば、あなた方達と永遠のお別れを致しました、あの断腸の日々はようやく忘却の彼方に消え去らんといたして居りますが、貴方がた達を偲び貴方たちのいさおし（勲功）を誇りと思わぬ日は、一寸たりと私達の脳裏から離れ去ったことはありません。否、それどころか、ますます、その尊敬の念は強固にその愛惜の心は絶えがたく、日毎夜毎、私たちの胸に蘇って止まないのであります。

その依つてくるところ、即ち今日のこのささやかな会合となつた次第でございます。ここに会する者は誠に僅かな数ではあります、広くこの日

を期し、避けがたき公務を放棄し、抜き差しならぬ家業を中止し、喜び勇んで馳せ参じた有志たちでございます。

終戦後すでに二十五年この間私たちはそれぞれその境隅に應じて、苦しくまた貧しい生活を送る止むなきに至り、その果にともしれば「このままくじけてしまつた方がどんなによかつたか」と、ある時は敗戦を知らず、靖国の神となられた貴方達を羨ましく思つた事もしばしばありました。

しかしながら私たちには、かつて土浦でまた三重で、筑波おろしに潮風に鍛えに鍛えられた予科練魂、すなわち百折屈せず、千挫たゆまざる予科練魂がありました。

「なにくそ、負けるものか、頑張るぞ」と、かくて今やそれなりに己が道を切り開き、漸やく各方面に地歩を築くに至つたのでございます。

今や我が国は、その素晴らしい経済発展につれ、世界の大国としての地位をゆるぎないものといいたしました。

「戦争に負けて一番幸福な国になつたのは日本だ」と、世界の人々より驚異と憧憬の眼をもつて仰ぎ見られつつある現況でございます。

この豊かな、素晴らしい今日の日本を、私たちは一目あなた方達に見て貰いたかつた。否、共にこの平和を味わいたかつた。私たちはしみじみ思っています。

今、あなた方達が生きて居られたなら、どんなにか巨大な業績を積まれ、素晴らしい手腕をもつて貢献されたことかと。思えばあなたがた達は、当時の日本の最優秀な青少年達でございました。あなたがた達以上に美しく、爽やかな青少年がこの地上に、果たして存在していただでありました。うか。その優れた素質と体力を引っさげて、率先、救国の至情ほとばしるまま、身を海軍航空隊に投じ、秋霜に抗じ烈日に耐え、刻苦心身を鍛えられたのであります。

たまたま今次大戦勃発するや広く太平洋、印度洋と鷗翼万

里、向かう処敵なくまさに世界を驚倒せしめたのであります。

「日本海軍に予科練あり」これは今なお世界の人々の知るところであり、その栄光と闘魂に対する、敬慕と名声は日増しに高まりつつある現況でございます。

しかるに敵比島、沖縄に迫るにおよび、今こそ国を救う道は一つしかない、我々予科練は国の柱になるぞと、純情愛国の情熱は火と燃えて一機また一機、一艇また一艇と、従容として敵艦に投入していつたあなたがた神風特別攻撃隊回天特別攻撃隊、震洋特別攻撃隊、その他の攻撃隊の勇士たちのお姿は人か、はた神か今もなおその神々しく凜々しい飛行服のお姿は、私どもの瞼の裏に焼き付いて払えども払えども消え去ることはできぬのであります。

星移り世は変わりゆくといえども、天地の大道は二つあるなく、あなたがたのまごころは万世に香り、永遠に日本の

守り神、いな世界の人々の鏡として、かつてあなたがた達の憧れた、あの青空の果て、雲流る玉座に神鎮まりますことを確信いたすものでございます。

本日は県内各地に分散していた同窓間の連絡も急速に復活し、ここに有志一同に会し、まず、あなたがた達護國の英霊にご対面の一時を過し、心ゆくまで近況をご報告申し上げます。

なお、私たちはこの後、雄飛会埼玉県人会を組織し、かつての熱い団結と伝統を守り、生ある者は心をついに、あなたがた達が身をもって示された純真にして高邁なる精神不屈不倒の子科練魂を継承し、広く社会の善導と平和日本、ひいては平和世界の確立に邁進せんとするものでございませぬ。

願わくば在天の英霊、はるかに見そなわし、とこしえに私たち県人会会員一同にたいし鞭撻激励を給わらんことを。

昭和四十五年八月十五日

雄飛会埼玉県人会

代表 山田 稔

霞ヶ浦湖畔に立つ

「若鷺の歌」碑

職場や、同好のグループの宴席でよく私は、「若い血潮の……予科練の歌を」と所望される。が、実は私はあまりこの歌は歌いたくないのである。それは戦争を知らない若い人たちから「反動」と思われたくないだけではなく、当時あの歌を選んだ一人として、また、大空に奮命を捧げながら、祖国に裏切られた若き英霊たちを忍び痛恨に耐えぬからである。

昭和五十五年十月十九日、かつての海鷺揺籃の地、土浦海軍航空隊（現自衛隊武器学校内雄翔園）に「若鷺の歌」の歌碑が建てられた。

当日はすでに幾分体調不充分にも関わらず、この歌の作曲者である古関裕而氏が親しく臨席され、除幕とそして往時の作曲にまつわるエピソードを話され

たが、この中で「東宝映画決戦の大空へ」の主題歌として西条八十先生の詞にあらかじめ作曲したが、土浦へ向かう車中で急に曲想が湧き、隊へ着いた時、どちらにすべきか？その相談を教官連中に持ちかけたところ、「それは練習生に決めて貰ったら」との申し出に、内心、練習生といっても子供、はたしてどうかと内心危ぶみながらも、そのような取り計らって貰った云々と唸唸（とつとつ）と、しかし、ハッキリした口調で語られた。

爽やかに晴れ渡った秋空の下、あの頃と同じく霞ヶ浦の湖水は青々と縹渺と望めた。

私の追想は遠く昭和十八年の往時に飛んだ。

「練習生総員集合！直ちに第一練兵場へ」のスピーカーに私達は陸続と隊伍を組み、たちまち号令台前に白い花を咲かせた。

台上にはすでに当直将校が立ち、傍らにアコーデオンを持った人を含め三・四人の背広服の人達が見られたが、これが古

関先生や歌手の波平さん達だとは後でわかったことだ。「折り敷け」の号令で座った私達に向かつて、集合の趣旨が伝達された。

「皆知っている通り、今、映画の撮影が当隊において進捗中であるが、この主題歌となるべき曲を二つ聞かせるから良いと思つた方に、手を挙げよ。いいか」「ハーン」という一斉の声が大きく消えゆくうちにメロディーと共に歌手が歌い出した。

一曲続いてもう一曲……。やがて、私達の手は、総員二曲目即ち後の曲に挙がった。

これはかねて古関氏が用意されたものではなく、動く汽車の中で倉皇（慌ただしく）のうちにとまとめられたあの曲意外にも。

否、やがて日本全国の津々浦々にまで鳴り響き、そして現在にまで歌われる名曲の、「若鷺の歌」であった。

古関氏はなお語られる。

「十五、十六歳の練習生が選んだ曲については最後まで、どうかな？という不安があったが、



約束が約束故そのまま主題歌としたが、その後の経過は皆さんご承知の通り、さらにこの歌に刺激され、発奮され大空に、困難に殉じようと何万という青年が予科練に志願したという話を聞き、更に祖国のために身を捧げられたことを聞き、痛く責任を感じ、只、英霊のご冥福を祈るのみである」と結ばれた。

昭和十九年十月二十五日、米軍レイテに迫るに及び、劣勢を挽回する唯一の手段として一機一艦を目指す神風特別攻撃隊がフィリピンにおいて結成された。

の時、誰彼ともなくほうはい(彭湃・突然盛んな勢いで湧き起こる)として、あの「若鷺の歌」の大合唱が沸き起こったのである。思えば激しく、悲しい慟哭の時代であった。

散華した若鷺達の切々たる遺書や、凜々しい遺影は、碑の近くの「雄翔館」に飾られて見る人々の涙を誘う。近時見学者は踵を接し年間万余を数えるという。

「若鷺の歌」碑は万感こめて永遠に霞ヶ浦湖畔に建つ。再びあの悲劇を繰り返さぬ為にも！。

続く

「真珠湾開戦秘話」

ペローズ空軍基地

二つの記念碑の物語

ハワイといえは、日本人の誰もが一度は訪問してみたいと思う、アメリカの代表的な観光地です。しかし一般の日本人観光客が訪問することができない、でも日本国民にとって、とても大切な

場所があることはあまり知られていません。その場所を平成二十六年に訪問をした、海原会参与の脇田四郎氏に、日米開戦八十周年を迎える今日、「真珠湾開戦の秘話」として伝えていただきます。

(編集委員)

海原会参与

甲飛十三期 脇田 四郎

今年には太平洋戦争勃発から八十年を迎え、盛大な記念式典がハワイ真珠湾記念広場で行われる予定でしたが、コロナ感染症の関係で昨年に引き続いて中止にされるものと思われる。

普通の年であれば、ハワイ州政府及び米海軍主催の慰霊祭が十二月七日に(現地時間)、ハワイパールハーバーで開催され、公益財団法人海原会を代表して、理事長の菅野寛也氏が出席されている。

菅野理事長は、昭和二十年六月に、静岡市上空で激突・墜落し戦死したB29の搭乗員二十三

名と、静岡市民二千名の日米合同慰霊祭を「犠牲者には敵も味方もない」との強いお気持ちで五十年近く続けておられる。同様にハワイでも合同慰霊祭に参加され、五年前からハワイ州の公式行事とされている。(会誌四六六号八頁参照)

私は、平成二十六年十二月に開催された、日米開戦七十五年慰霊祭の翌日、日本軍犠牲者六十五名の冥福を祈るために、米海軍及びハワイ日本総領事館並びにハワイ仏教界の合同で行われた追悼法要式に、菅野理事長ご夫妻とともに出席した。

そしてその翌日、菅野理事長のハワイ訪問時にはいつもお世話になっている、米海兵隊退役中佐メイヤーズさんから「サカワキの記念碑に案内しましょう」と言われた。一瞬「サカワキとは誰のことか」と、思い当たらないので聞いてみると、真珠湾攻撃時に小型特殊潜航艇で参加し、拿捕された酒巻和男少尉のことと言われて思い出した。

酒巻少尉は、羅針儀の故障で真珠湾内に突入できず、漂流したため自爆を決意し艇外に出てなんとか砂浜にたどりついたが、その時にはすでに人事不省となり捕虜になった事は、周知されているところである。

菅野理事長ご夫妻とご一緒にメイヤーズさんの案内で、オアフ島カネオ湾に沿った一大住宅地カネオへ市街の中心部から少し離れた場所に所在する、カネオへ海兵隊基地へ向かった。

高速道路H三号線を、オアフ島北部のカネオへ方面に向けて車は走る。途中著名な観光名所「ヌアヌバリ展望台」に立ち寄り、眼下に広がるカネオ湾から吹き上げる強風を浴びながら、絶景を展望した後、再びカネオへ米海兵隊基地へと車を走らせた。

カネオへ海兵隊基地には、空母「蒼龍」所属の第二次攻撃隊制空隊第3中隊第1小隊の、飯田房太大尉率いる9機が、制空隊として攻撃に参加し、基地への銃撃の後、後続の艦攻、艦爆の

攻撃が始まったため、近くのペローズ空軍基地に目標を変えて同基地を攻撃、地上の敵機に銃撃を加えた後、カネオへ上空にさしかかった時、被弾した飯田大尉は「われ燃料なし、突っ込む」と指先信号を送り格納庫に突入し自爆された。

この様子は「日米開戦と真珠湾攻撃秘話（中央文庫発刊）」の二五四頁に、第二次攻撃隊制空隊第3中隊第2小隊長の藤田怡与蔵中尉が確認した様子が、その手記に記されている。自爆された飯田大尉は米海兵隊により丁重に埋葬されたのち、遺骨は日本に返還されている。この記念碑には毎年ハワイを訪れるたびに欠かさず「レイの花束」を手向けお参りをさせていただいている。

そして、このカネオへ海軍基地からそう遠くないところにペローズ空軍基地がある。かつて空軍基地であった場所は、現在「ペローズ・ビーチパーク」として軍関係者の滞在施設が設けられていて、椰子木立の間に

コテージが用意されている。

「このペローズ空軍基地の砂浜に真珠湾攻撃の翌日、羅針儀の故障で漂着した小型潜航艇と人事不省のまま打ち上げられていた酒巻少尉を発見した陸軍歩兵部隊員が、少尉を逮捕した事、そして酒巻少尉が太平洋戦争の日本捕虜第一号である」と刻字されている記念碑が設置されている場所へ案内された。記念碑の設置してあるペローズ空軍基地は、現在も米軍施設として管理されているため入場規制されており一般人は入れない。

基地入り口には小さな検問所があり、警備は厳重で軍関係者のみ入ることができると、身分証明書が必要で、メイヤーズ退役中佐が衛兵にIDカードを提示すると衛兵が同乗者について詰問した。中佐は「自分の友人で日本からきた太平洋戦争中の日本海軍のパイロットだ」と身分を話しながら我々3名の旅券を提示、確認した衛兵は敬礼して中に入るようにとオーケーのサインをだしてくれた。

検問所を抜けてしばらくは何もないほぼ真つすぐな道路を走るが、ここが戦中及び戦後暫くの間、空軍の滑走路があったところだと説明された。

暫く走ると右手に海岸線が見え、木立の中に点々と洒落たコテージ風の建物がいくつも見えてきた。静かな環境で、木立の間からは太平洋が美しい景色を見せている。コテージ風の洒落た建物には、休暇をゆつくりと楽しんでる家族の姿が見え隠れする。余計なものは一切なく、静まり返っていて、木立を抜ける海風の音と遠くからは波の音のみが聞こえてくる。点在するコテージ群を過ぎると、管理事務所らしき建物が見えてきた。

管理事務所側の海側には、隣接して海辺を一望できる簡単なバルコニーがあり、そこで何人かの家族が飲み物を飲みながら談笑していた。我々も長時間のドライブで喉も渴いたので一休みして冷たい飲み物を手にして、四方山話をしながら暫くの間ゆつくりした。

やがてメイヤーズ退役中佐から、「この海岸が昭和十六年十二月八日（ハワイ日時）砂浜に座礁している日本の小型潜水艇が発見されて、乗組員の酒巻少尉が捕虜第一号として捕らえられた所だ」と説明を受けた。

日本では五隻の特殊潜航艇が真珠湾内に突入し酒巻少尉を除く全員が戦死、九名が軍神として崇められた事は周知のことであつたが、まさかこの海岸に彼の特潜潜航艇が座礁して捕虜第一号となり、しかも記念碑が設けられてあるとは知らなかつた。

特殊潜航艇の話から、日本海軍に関心のあるメイヤーズ退役中佐から日本海軍の予科練習生教育と飛行専修練習生について質問があり、飛行訓練の事など話していたが、なにはともあれ早く記念碑を見たいので話を途中で打ち切り急いで管理事務所前に出て右側を見ると、小さな記念碑が二つ並んで設置してあつた。

最初に左側の記念碑を見ると、次のように刻字されていた。「昭

和十六年十二月八日オアフ島北東部の、ペローズ空軍基地の岩礁に乗り上げていた日本の十九号小型潜航艇は、陸軍と海軍の兵隊に捕獲された。浜辺に泳ぎ着いた艇長は人事不省になり歩兵第二九八部隊のプリボン少尉とアクイ伍長に逮捕され、もう一人の乗組員は既に死亡していた。」アメリカにとつては小型潜航艇で攻撃した酒巻少尉が日本人捕虜第一号だつた。

この日本人捕虜第一号について米国の資料を見ると次のように記述されている。

「ペローズ基地は、第二次世界大戦において第一号の日本兵捕虜を捕まえた特別な場所として知られている。一九四一年十二月八日、朝、五時四十一分、酒巻和男海軍少尉の小型潜水艇（A-19）はペローズ空軍基地の沖合で座礁した。それは真珠湾攻撃に関係していた五隻の小型潜航艇の一隻であつた。酒巻少尉の艇は羅針儀の故障で操舵に苦しんだ後、島の周りを漂流した。酒巻少尉と同乗乗組員は、

潜航艇の起動用バッテリーから発生したガスにより、意識が朦朧となつた。潜航艇が座礁したとき彼らは、艇から退去することを決断し、潜航艇を破壊することを試みたが失敗し、二人は海岸へ泳ごうとした。しかし、酒巻少尉だけは泳ぎ着いたが、彼の同僚は、後になつて死亡して海岸に打ち上げられた。」

この真珠湾攻撃時の特殊潜航艇に関する日本の資料を見ると、次のように記述されている。

「本来、洋上での攻撃を目的として考案された特殊潜航艇、甲標的（以後「特潜」と省略）が敵の重要港湾に潜入し、奇襲攻撃する用法に変わったのは、特潜艇長岩佐大尉以下の烈々たる熱意にうたれ、山本五十六連合艦隊司令長官が採択の断を下したことによる。

特潜を真珠湾攻撃に用いると決定したのは、昭和十六年十月の下旬であつた。当時本艇は約二十隻完成しており、早速そのうちの五隻が、丙型潜水艦（伊十六型）の後甲板に一隻宛て搭

載できるよう改造工事が施され、航統距離を伸ばすため特型気蓄器を増載し、更に予想される障害物、防潜網突破のため網切器また発射管及び推進器等に防護材が付加され、攻撃に失敗し捕獲されるのを避けるため自爆薬などが装備された。この工事も並行し乗組員の訓練はもちろんで母潜水艦の改造工事も昼夜兼行で行われ、期日ぎりぎりに完成した。昭和十六年十一月十八日、特殊潜航艇五隻からなる特別攻撃隊は、母艦の伊号第十六、十八、二十一、二十二、二十四号の潜水艦の背にそれぞれ一隻ずつ搭載され、佐々木大佐指揮のもと安芸灘を密かに抜け、ハワイ方面へと向かつた。

途中ハワイに近づくに従い六百カイリ圏からは、昼間は潜航夜間は洋上航走をして、搭載している特潜の性能維持に気遣いながら隠密裏にハワイ沖の配備点を目指しながら、開戦日十二月八日には真珠湾口十カイリの配備地点に着いた。そして十

二月七日午前三時から三分間隔で順次真珠湾口へと発進された特潜は、湾内に潜入後、海底で待機、航空部隊の空襲に合わせ、攻撃開始、その後夜間を選び、ラナイ島西方七カイリに浮上待機している潜水母艦に辿り着く計画であった。

しかし、真珠湾の入り口は、狭い一本の深水路で付近には浅瀬が多く、その入り口には防潜網が張られ、米艦艇の出入り時だけ開くようになっていた。特殊潜航艇は、待機しその機会を逃さず、敵艦艇の通過と同時に湾内に潜入しようとしていた。丁度、午前五時から八時までには掃海艇入港のため網があげられていたので、その時間に潜入した艇もあったであろう。」

その後の状況は、戦後明らかにされた日本側の資料と米戦闘公報によると、概要は次のとおりである。

【午前三時五十分ごろ、掃海艇コンドル号が自艦と並び侵攻中の小型潜水艦らしきものを発見、捜索したが見失ったと報告

している。また、敷設艦ブリーズが特殊潜航艇を水中で発見、水上機母艦カーチス、工作艦メズーナ、駆逐艦モナハンの三隻も上甲板まで洋上に現わして迫るのを目撃、更にモナハンとカーチスに向かって、魚雷を発射したが命中せず、海岸で爆発した。

モナハンは爆雷を投射、カーチスは機関銃で小型潜水艇の司令塔を射撃、沈めたと報告している。日本側の報告から推測すると、酒巻艇は羅針儀故障のまま無理して出撃したため、自艇の位置を失って、数度の座礁と駆逐艦の攻撃に見舞われ、魚雷発射口の損傷と、浸水による蓄電池からの有毒ガスの発生に悪戦苦闘すること二十四時間、突入を断念、収容地点ラナイ島に向かうが羅針儀が故障のため真珠湾の裏側ワイマナロ湾で座礁、ラナイ島と思ひ込んだ酒巻少尉は艇の自爆装置に点火、稲垣兵曹と海中に飛び込み陸地を目指したが、荒波にもまれ稲垣兵曹は溺死、酒巻少尉は人事不省のまま海岸に打ち上げられ捕虜と

なった。

なった。

他の四艇はいずれも湾口に達し、岩佐艇は湾内潜入に成功し、魚雷攻撃をしたが撃沈された。後で引き揚げられた艇体からは遺品が発見され返還されているが、魚雷は発射済であった。横山艇は「我奇襲に成功せり」の電信を打っているのを我が潜水艦が受信しており、湾内に入り攻撃成功したのは確実と思われる。芳野艇・広尾艇は湾内潜入前に湾口付近で米艦艇に発見され、交戦後撃沈されたものと見られるが、航空機攻撃中に米艦船の間で「魚雷注意」の警報が盛んに発せられた事に鑑み或いは、潜入に成功し敵艦めがけ必死の魚雷を打ち込んでいたのではないかとも思われる。

特別攻撃隊の戦果は、航空機隊による攻撃の陰になり明らかではないが、米国側に与えた精神的脅威や恐怖心は極めて大きかったであろう。特潜出撃後、母艦の潜水艦隊はラナイ島沖で四十八時間待機していたが、帰還する艇は一隻もなく、収容す

る艇ないまま佐々木司令艦長以下全乗員の黙祷のうち艦は静かに帰投についた。」

管理事務所内に掲示されている一九八二年六月二十六日付けの新聞「ホノルル・アドバタイザー紙」には、酒巻少尉についてかなり詳しく記述されている。記事内容は左記のように書かれている。

ホノルル・アドバタイザー紙の掲載記事（一九八二年六月二十六日付）

真珠湾攻撃の小型特殊潜航艇艇長が振り返る

酒巻和男は第二次世界大戦の米國最初の捕虜であった。彼は二人乗りの日本の小型特殊潜航艇で、戦艦ペンシルバニアを沈めようとした翌日、一九四一年十二月八日に捕らえられた。

彼は真珠湾攻撃に失敗したが、しかし生き残って捕虜終了所で四年間を過ごした。日本の猛攻撃の中で、他に九人の潜航艇乗組員が行方不明もしくは死亡し

た。彼が捕らえられてから約四十二年後の先週、酒巻は捕虜収容所に収監されていた際に、彼を丁寧に扱ってくれた人々に感謝の意を示し、また他の潜航艇の乗組員になががあったか調査し、さらに彼らの攻撃について記録されている歴史上の間違いを訂正するために、ホノルルに滞在した。

酒巻は英語を話すことができず、あえて日本語で話すことを希望し、執筆家のパステイ・サイキが通訳を務めた。彼女は第二次世界大戦中に収監された約一千四百人のハワイの日系人について、「ガンバレ」という本を出版した。この本には酒巻が戦争捕虜であった時の話も記載されているのでその一部を紹介する。

「捕虜となった後、彼は二か月半ほどハワイの日本人収容所（サンド島）に収監された。」とサイキは語った。「収容所の人々は彼に大変親切だった。彼に頑張ることを勧め、司令官に、彼がよく処遇されるよう

に話してくれた。いまでも約二十から三十人がまだ存命で、彼は新聞を通じてその人々に感謝の意を伝えたいという。また彼は本土の POW キャンプでも四年間に渡って良く処遇され、恥を感じて自殺を考えるようなことがなかったことをアメリカ政府に感謝したいとしている」

一九四一年海軍兵学校出身の酒巻は艇長七十九フィート、搭乗員二名で魚雷二本を搭載し、真珠湾を攻撃する小型の潜航艇の艇長を命ぜられた。彼と他の九人の隊員は、五隻の通常の潜水艦の上に、五隻の特殊潜航艇を搭載し、真珠湾に向けて日本を出港した。十月六日午後十一時、酒巻艇のジャイロスコープは故障していたが、真珠湾の約十マイル南で出撃した。潜航艇は結局真珠湾の海軍の軍港に到達することはなかった。壊れたジャイロでは当然のことながら侵入コースを維持することは出来なかった。二隻のアメリカの駆逐艦からの爆雷攻撃もあり、酒巻が約十八時間後に攻撃を諦

めてラナイの集合場所に向かうまでには二回にわたって岩礁に衝突した。その後、潜航艇はコースを外れ今度はカネオへの海兵隊基地近くにある別のサンゴ礁に接触した。潜航艇の爆破に失敗した後、酒巻は彼が捕らえられた浜辺に打ち上げられた。彼のもう一人の乗組員は溺死していたのは明らかだ。一九四五年に酒巻が帰国したとき、日本の国粋主義者の中には捕虜になるよりむしろ、ハラキリすべきだったという人もいた。そうした見方に対して彼の考えは、生きて再び日本に奉仕する、というものだった。

一年後彼は結婚しトヨタ自動車に仕事を得た。十二年前トヨタは、彼をブラジルのサンパウロ事業所の責任者として派遣した。トヨタで三十六年間仕事し今年六月に退職したが、トヨタからは引退するよりも関連会社から社長をと改めて任用された。この度の一週間にわたるホノルルでの休暇はトヨタ自動車が彼と妻に提供したものだ。

第二次世界大戦以後、酒巻は「私は真珠湾を攻撃した」という本を書き一九六五年に東京への途上ハワイに立ち寄って以来他の特殊潜航艇とその乗組員の最後がどうであったのかを調べてきた。また、新聞には米国を奇襲攻撃後、拿捕された日本の特殊潜航艇を米国政府は戦時国債の募集の宣伝に大型車に搭載してワシントン、ニューヨークから全米主要都市を巡回して回ったことも書かれた。



(左側が酒巻少尉の碑)

酒卷少尉の記念碑に並んで写真に写るもう一つの記念碑は、

太平洋戦争における米国の戦死者第一号となった、二人の犠牲者を称えた記念碑である。碑文を読んでみるとそこには、二人の名前が書いてありました。

ハリス・クリステンソン少尉とジョージ・ホワイトマン少尉の二名の米軍兵士である。

開戦当日、当然のことながら第二波の攻撃隊がこの空軍ペロース基地を攻撃した。その時、日本機迎撃のために急遽発進した二機の米軍戦闘機があり、そのパイロットが前述の二名です。二人は離陸滑走中に、日本機の銃撃を受けて戦死及び、戦傷しました。

記念碑には「陸軍航空隊第四十四追跡飛行隊のハリス・クリステンソン少尉とジョージ・ホワイトマン少尉は昭和十六年十二月七日日本機の攻撃により戦死したのを記念して」と刻まれている。

この二人のパイロットの物語は米国では広く知られている。

米国側資料を読むと概要は次のような経緯である。

『若年二十二歳の青年士官ホワイトマン少尉は、わが身を捨てて、急襲してきた零戦に敢然と飛び立ち、反撃に移る瞬間に銃撃を受けて戦死した。太平洋戦争に於ける米国戦死者第一号として広く知られている勇者である。』

昭和十六年十二月七日は日米開戦の火ぶたを切った真珠湾奇襲攻撃の日である。開戦時の日本軍のペロース空軍基地攻撃の様子を簡単に記述すると、奇襲攻撃をした日本海軍航空部隊は第一派が日曜日の早朝七時半過ぎ真珠湾を一八三機で攻撃し、その約五十分後に第二派の攻撃隊が東側から攻撃をしている。

この部隊のうちの数機が、カネオ海兵隊基地を攻撃した後、近くのペロース空軍基地を攻撃したものと思われる。この時、基地にいたジョージ・ホワイトマン少尉は、急遽迎撃のために戦闘機で離陸滑走中に、零戦の銃撃を受け滑走路の先端に激突

して戦死した。

もう一人のハリス・クリステンソン少尉は搭乗した戦闘機がまだ十分な離陸態勢にならない時に、銃撃を受け足に被弾し機外へ放り出された。

この二人のパイロットの他にもう一人パイロット、ピシヨップ中尉が操縦する戦闘機は、離陸はしたが十分な高度が取れない中で銃撃を受け、何とか海上に不時着した後、機内から飛び出し急ぎ泳いで戻り無事であったとされる。

このペロース空軍基地を攻撃したのは航空母艦「蒼龍」所属の第二派攻撃隊制空隊第二小队藤田怡与蔵中尉が率いる3機の零戦であった。

この銃撃事件についてインターネットで探した米空軍の資料を読むと次のように書かれている。『ジョージ・ホワイトマン少尉は、エミリー・ホワイトマンの十人家族の長男として、ミズーリ州ウインカールソン近くの農場で生まれた。彼はセデリア・スミス・コットン高等学校を卒業

し、一九三八年に陸軍航空隊へ入隊、テキサス州のランドルフ・フィールド空軍基地でパイロットとしての訓練を受け、一九四〇年十一月十五日に少尉に任官し、ハワイのホイラー空軍基地へ赴任した。

一九四一年十二月七日(日)早朝、日本軍による真珠湾攻撃が始まった。当時ホワイトマン少尉はペロース空軍基地に勤務しており、日本機の攻撃に対して、彼は戦闘機(P-40B)に搭乗し迎撃に向かったが、離陸滑走中に零戦の猛射を受けた。

銃弾はコックピットに命中し戦闘機は撃破され、制御が不可能となり滑走路の先端に激突し炎上戦死した。』

昭和十六年十二月七日の早朝の出来事について米側の資料に詳細に記述されているので、その一部を紹介する。

『日本帝国海軍航空部隊が、米国に対して奇襲攻撃を開始したのは、第四十四追跡飛行隊がハワイのペロース空軍基地に配置されていたときだった。』

一九四一年八月七日、新入隊者や徵募新兵に基礎訓練を施すための新兵訓練キャンプ地として設営されたペロース空軍基地は、第八十六偵察飛行隊の本拠地でもあった。

この第八十六偵察飛行隊にはP-40（ウォーホーク）戦闘機の一飛行隊に加えて、O-47単葉偵察機六機と、O-49軽量警戒機二機が装備されていた。第四十四追跡飛行隊（PS）所属の三名のパイロット、ハリス・C・クリスチャンセン少尉、ナミュエル・W・ビショップ少尉及びジョージ・A・ホワイトマン少尉の三人はペロース空軍基地でP-40（ウォーホーク）戦闘機の射撃訓練を行っていた。日本帝国海軍航空部隊の攻撃目的の一つは、オアフ島の陸上基地の航空兵力を殲滅することにあった。

米国陸軍航空諸部隊の当初の反応は遅く、爆撃によって真珠湾が震撼することに反撃のフェーズが跳ね上がった。

ペロース空軍基地勤務の曹長

代行は、夜明け後間もなく天幕地帯（当時の宿泊施設は天幕であった）に駆け込んできて、寝ている者たちを起こすために、カネオへ海兵隊基地が爆撃されたぞと大声で叫んだ。

それからほどなく午前八時十分、ヒツカム空軍基地からペロース空軍基地に「火災が猛威を振るっているので消防車を一台寄越してくれ」と要請があった。その連絡で、ヒツカム空軍基地は、現在敵の攻撃が進行中であることが確認された。

午前九時、日本の戦闘機一機が東方の海上から飛来し、天幕宿舎（当時のパイロットの宿舎は天幕であった。）を銃射した。続いて北方から日本の三機編隊の戦闘機の攻撃があった。飛行場要員（地上整備員）が急いで燃料を分散し、ペロース飛行場滑走路の端に並んでいるP-40十二機に弾薬を補給しているとクリスチャンセン少尉が飛行機に駆け付けた。彼は真つ先に到着した一人だった。しかし、クリスチャンセン少尉がコックピット

トに入ろうとしたとき、敵機の銃弾が彼の足を貫き、クリスチャンセン少尉は負傷して整備員の足元に飛行機から落下した。不幸なことに前日までP-40

射撃訓練を行っていたために、全装備を機体から取り外して洗浄整備をしていたために、敵機の来襲で慌てて燃料補給と銃火器類の取り付けを行わなければならなかったのである。

ホワイトマン少尉は独身士官宿舎の自分の部屋から、ペロース飛行場まで車で駆け付けた。到着すると同時に日本の戦闘機が地上掃射を開始する間、ホワイトマン少尉は離陸準備ができているP-40を発見。地上整備員が彼の搭乗機に弾薬を搭載中、ホワイトマン少尉は彼等を押しつけてコックピットに飛び込み、すぐに離陸のため滑走路に向かってタキシングを開始したのを、二機の日本の零戦が攻撃を始めた。ホワイトマン少尉はなんとか離陸しようとしたが、敵機の激しい機銃攻撃をエンジン、翼とコックピットに受

け飛行機は一気に炎を噴いて滑走路の端に激突した。地上整備員は急いで駆け付け、業火の中からホワイトマン少尉を助けだそうとしたが出来なかった。

こうしてホワイトマン少尉は炎上する残骸の中で潰えた。敵の攻撃はわずか十五分間であったが、クリスチャンセン少尉、ビショップ中尉、とホワイトマン少尉の名前は長く第四十四追跡飛行隊の名誉となった。」

クリスチャンセン少尉は真つ先に飛行場へ駆けつけた一人だった。この勇敢な行為に対して銀星賞、名譽の負傷に対してパール・ハート勲章、外地従軍記念略章付きアメリカ防衛記章、アメリカ軍事作戦記章、アジア太平洋軍事作戦青銅一つ星付き、及び第二次世界大戦勝利記章等が与えられた。

ビショップ中尉は、搭乗機に攻撃を受け機体に大きな損害を被り、自らは足に負傷したため、急遽海上に不時着水して泳いで海岸に戻り、この苦難を生き抜

いて他日戦いに参加した。
ビショップ中尉の賞状を読むと、『彼は初陣に際して、圧倒的な敵の攻撃のもと、主導性を發揮し、沈着冷静な対応をした。』

その断固たる行動は、敵の突然の攻撃を排除することに貢献するところ大であった。負傷後泳いで海岸に戻り、後日障害を乗り越えて戦うという、彼のたった行動について銀賞が授与された。』と書かれている。

ホワイトマン少尉は第二次世界大戦中に米国が攻撃を受けた時に戦死した最初の航空機搭乗員の一人であるとされている。彼の死後その日の勇敢な行為に対して、シルバースター勲章、パープル・ハート勲章・外地従軍記念略章付きアメリカ防衛記章・アメリカ軍事作戦記章・アジア太平洋軍事作戦青銅一つ星付き・及び第二次世界大戦勝利記章等銅メダル、そして第二次世界大戦の勝利でアメリカの防衛勲章等が授与された。
加えてもう一つのホワイトマン少尉の名誉は、彼の死後四階

級特進して中佐に昇進されていることである。(シルバースター勲章は、戦死者に与えられる我が国の二番目に高い勲章である。)

彼の死後十年目となる一九五五年八月二十四日に、ホワイトマン少尉の生地ウイルクソンにほど近い、ミズーリ州ノックスタールにあるセダリア空軍基地司令のネイサン・トワイニング大將は、ホワイトマン少尉の母親に、新しく改装されるセダリア空軍基地の名称が、彼女の息子の名前にちなんで「ホワイトマン空軍基地」に改名されることを知らせた。ホワイトマン少尉の名誉を称え、改装されたホワイトマン空軍基地の記念式典は同年十二月三日に挙行され、彼の功績と名譽は永遠に残ることになった。

現在ホワイトマン空軍基地は、米国の地球規模攻撃軍団の中の第八空軍に属し、第五〇九爆撃航空団として、二つの爆撃飛行隊を持ち、最新鋭の攻撃爆撃機B-12を装備する米国でも最重

要な航空軍団の基地となっている。

天国へのメッセージ 第一回

今月号から、日頃思いを伝えたくても今となっては伝えられない、天国に住む皆さんの大切な方に伝えるメッセージを掲載いたします。伝える相手は、予科練関係者でなくてもかまいません。先に逝ったご家族や、ご友人への伝言も受け付けます。貴方が今一番伝えたい方に、これまで伝えられなかった想いを、是非伝えてみてください。投稿いただいたメッセージは本機関紙に掲載させていただきます。海原会ホームページでも公開させていただきますとともに、五月開催予定の慰霊祭において一部を朗読させていただきます。また全てのメッセージを二人像に一年間奉納いたします。匿名ご希望の方はその旨注記ください。

(事務局)

海原会元会長

甲飛十二期 桜井房一様へ

貴方がそちらへ行かれて長い年月が過ぎてしまいました。海原会の行く末を頼みたい」と何度も我々のところに来られ、頭を下げていただいた桜井さん。

あれから十五年が過ぎました。私なりに貴方との約束を守るために、今日までなんとか頑張ってきました。満足していただけますか。まだまだ不満足と感じておられるでしょうね。今年事務所を、予科練の聖地阿見町に移転します。地元で仲間を増やし、貴方に満足いただけるように、更に精進します。堺さんも、藤野さんも、羽田さんも、助村さんも、早川さんも、安藤さんもみんなそちらへ行っちゃいます。予科練同窓生もめっきり寂しくなりました。残された同窓生の皆さんがいままで元氣な日々を過ごせるように、そちらから見守ってくださいね。

理事 平野陽一郎

【お知らせ】

機関誌467号の

早期発行について

会員の皆様には、日頃から機関誌「予科練」をご愛読いただき大変ありがとうございます。

機関誌は通常、皆様のお手元に発行月の初頭にお届けできるように編集及び郵送手続きを行っておりますが、十一月発行の第467号につきましては、大森事務所の移転作業のために通常の発送業務を行うことができません。このために、発行時期を半月ほど早めまして十月中旬に、お届けいたしました。

定期購読をさせていただいております会員の皆様には、事務局の都合でご迷惑をおかけいたしますが、なにとぞご高承たまわれますようお願い申し上げます。なお、新年号からは通常通りの発刊を予定いたしますので、これまで同様ご愛読いただけますようお願い申し上げます。

(編集部)

(公財)海原会寄付者芳名簿

(敬称略) (単位千円)

令和三年七月より

- 一〇 原島 淳子(一般)東京
 - 五 藤野 つね(乙19)埼玉
 - 一〇 竹前 正一(乙19)長野
 - 三 村木 良治(乙22)大阪
 - 四〇 小池よし子(乙18)静岡
- 海原会へのご芳志
誠に有難うございました。

事務局日誌

六月

九日

日本産業広告社大熊様来所
於 事務局

平野理事が、ネットワーク
海原会の今後の在り方について、担当者と意見交換

七月

一日

野村不動産ソリユーション
ズ担当者来所
於 事務局

大森事務所の売却について
意見交換
五日
後藤行政書士来所
於 事務局

令和三年役員交代について
法務局への届出依頼
六日
マンション管理組合理事会
於 Luz大森

事務局長が出席し、事務局
の移転について報告
十日
大東亜戦争戦没者慰霊団体
協議会慰霊祭出席
於 靖国神社

平野理事が出席した。
十六日
第五十五回慰霊祭記念音楽
演奏会の説明

於 武器学校&阿見町役場
平野事務局長が、来年開催
予定の音楽演奏会について
広報班長及び町長公室長に
説明を行った。

八月

四日

自衛隊茨城地本訪問
於 茨城地方協力本部

平野事務局長が、海自音楽
隊の招聘について、協力を
要請した。
九日
移転引越し経費見積もり
於 事務局

移転に伴う引越し費用の
見積もりを依頼した。
二十九日
新事務所の工事見積
於 新事務所

新事務所における入居準備
工事費用の見積もりを行っ
た。



海原会会員の皆様へ

大切な人と寄り添うお葬式

家族葬

のことが知りたい

お葬式のご依頼や

「もしものとき」に

備えた事前のご相談

年中無休で承ります

相談・見積無料

お客様満足度
99%

※当社施行各アンケート調べ

自宅葬、日葬、お別れ会のほか、
ご希望に合わせた
お葬式プランがございます。

新型コロナウイルス感染拡大防止に万全を期しています。

お墓

お墓のことなら何でもご相談ください。墓石工事は信頼の10年間の保証書付きます。

墓所工事

標準価格
(10万円以上の)

10%割引

サービス提供エリア:
関東・関西・東海



「お墓のお引越しガイド
& 事例集」

無料で資料を差し上げます。

お葬式

葬儀一式をセット化した「葬儀式セットプラン」を各種ご用意。最適なプランをお選びいただけます。

葬儀

祭壇標準価格の

20%割引

※一部斎場、一部商品を除く。
新花で送る家族葬は
優待料金
サービス提供エリア・関東



「お葬式の流れが
わかる100項目」

無料で資料を差し上げます。

お仏壇

仏壇店は首都圏に2店舗(国分寺・千葉)。伝統型仏壇や家具調仏壇、手元供養商品まで豊富な品揃えです。

仏壇

店頭価格の

25%割引

※ただし、催事特価品と
仏具小物、手元供養商品
は対象外
サービス提供エリア・関東



「お仏壇カタログ」
「特選 お位牌」

無料で資料を差し上げます。

お問い合わせは
海原会事務局へ

03-3768-3351

お問合せの際は、「予科練を見た」とお申し出ください。

MAO
MEMORIAL ART CHINOYA



メモリアルアートの大野屋

<http://www.ohnoya.co.jp>



「予科練」第47号11・12月号
昭和53年7月26日第3種郵便物認可

令和3年11月1日発行
(隔月奇数月1回1日発行)

発行人 菅野寛也

編集人 保坂俊雄

発行所 〒140-0013

公益財団法人 海原会
東京都品川区南大井6-16-12
(大森コーポビタネース)

郵便振替
0014014019154333
00313768133512

定価500円